

☆年間第32主日(11月6日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

### 第一朗読 (マカバイ記II 7章 1-2, 9-14 節)

その日、七人の兄弟が母親と共に捕らえられ、鞭や皮ひもで暴行を受け、律法で禁じられている豚肉を口にしよう、王に強制された。彼らの一人が皆に代わって言った。「いったいあなたは、我々から何を聞き出し、何を知ろうというのか。我々は父祖伝来の律法に背くくらいなら、いつでも死ぬ用意はできているのだ。」二番目の者も息を引きとる間に言った。「邪悪な者よ、あなたはこの世から我々の命を消し去ろうとしているが、世界の王は、律法のために死ぬ我々を、永遠の新しい命へとよみがえらせてくださるのだ。」彼に続いて三番目の者もなぶりものにされた。彼は命ぜられると即座に舌を差し出し、勇敢に両手を差し伸べ、毅然として言った。「わたしは天からこの舌や手を授かったが、主の律法のためなら、惜しいとは思わない。わたしは、主からそれらを再びいただけるのだと確信している。」そこで、王自身も、供の者たちも、苦痛をいささかも意に介さないこの若者の精神に驚嘆した。

やがて彼も息を引き取ると、彼らは四番目の者も同様に苦しめ、拷問にかけた。死ぬ間に彼は言った。「たとえ人の手で、死に渡されようとも、神が再び立ち上がらせてくださるという希望をこそ選ぶべきである。だがあなたは、よみがえって再び命を得ることはない。」

### 第二朗読 (使徒パウロのテサロニケの教会への手紙II 2章 16節-3章 5節)

皆さん、わたしたちの主イエス・キリスト御自身、ならびに、わたしたちを愛して、永遠の慰めと確かな希望とを恵みによって与えてくださる、わたしたちの父である神が、どうか、あなたがたの心を励まし、また強め、いつも善い働きをし、善い言葉を語る者としてくださるように。

終わりに、兄弟たち、わたしたちのために祈ってください。主の言葉が、あなたがたのところまでそうであったように、速やかに宣べ伝えられ、あがめられるように、

また、わたしたちが道に外れた悪人どもから逃れられるように、と祈ってください。すべての人に、信仰があるわけではないのです。しかし、主は真実な方です。必ずあなたがたを強め、悪い者から守ってくださいます。そして、わたしたちが命令することを、あなたがたは現に実行しており、また、これからもきっと実行してくれることと、主によって確信しています。どうか、主が、あなたがたに神の愛とキリストの忍耐とを深く悟らせてくださるよう。

### 福音朗読（ルカ 20 章 27-38 節）

そのとき、復活があることを否定するサドカイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに尋ねた。「先生、モーセはわたしたちのために書いています。『ある人の兄が妻をめとり、子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』と。ところで、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、子がないうまま死にました。次男、三男と次々にこの女を妻にしましたが、七人とも同じように子供を残さないで死にました。最後にその女も死にました。すると復活の時、その女はだれの妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです。」イエスは言われた。「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである。死者が復活することは、モーセも『柴』の個所で、主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼んで、示している。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである。」

### 朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

少し冷えますが晩秋らしい好天が続いています。教会の銀杏の木も黄色い葉をつけ始めました。柿の木も黄色や赤色の葉に染まり始めました。冬の支度を始めた証拠ですね。かと思えば、山茶花などはこの季節に花を咲かせます。多くの植物が葉を落とすころに花を咲かせることによって、自分の子孫を残す確率が高くなるからだそうです。自然の奥深さに驚かさ

れます。

今日のミサの主なテーマは「死からの復活」です。カトリック教会では伝統的にこの十一月を死者の月と定め、私たちの「死と復活」を黙想する機会としています。私たちもこの機会に「私の死と復活」について考えてみましょう。

### 第一朗読 (マカバイ記II 7章 1-2, 9-14 節)

ここに記されている迫害と殉教の物語は紀元前二世紀、シリア王アンティオコス四世の時代のものだと言われています。ここに登場する若者と母親は勇敢にも自分たちに与えられた信仰を守り通したのですが、その信仰の心を支えたのは「復活への希望」だったのです。これまでの多くの殉教者たちも、そして現在、迫害を受けている多くの人々もこの「復活への希望」に支えられて、受難を耐え忍んでいるのです。また、七人の子どもたちを励ました母親はこの激しい迫害に耐える信仰心を育て上げました。この母にしてこの子達ありということです。私一人の信仰ではないのです。私の信仰は周りの人々に支えられまた大きな影響を与えているということを忘れないようにしましょう

### 第二朗読 (使徒パウロのテサロニケの教会への手紙II 2章 16節-3章 5節)

パウロは宣教旅行で出会った人々に励ましの手紙を書いています。出会った人々がますます信仰を深め、よい愛の業を実行していることを知り喜んでいますが、出会っただけでなくその後の信仰生活に関心を持ち続けているパウロは、本当に信徒の皆さんのことを考えて毎日生活しているのだなと感心させられます。現代は「他人のことなど」と無関心の風潮が多く見受けられますが、「他の人」への配慮こそ、私をよりよくする要素なのだと思える必要があります。「隣人への配慮すなわち愛」こそが私を信仰において育てるものだからです。

## 福音朗読（ルカ 20 章 27-38 節）

イエスがエルサレムの宗教者たちの間で影響力を強め始めたことに警戒を強める一派にサドカイ派というものがいました。彼らは「天使や復活」を信じていないグループでした。その人たちがイエスに「こんな人たちがいるときに復活はどうなるのか」と難題(?)を突き付けてきたのです。これが今日の福音のあらすじです。結婚している人たちには興味ある問題ですね。サドカイ派の人たちはこれはどうだとイエスに迫ったことでしょう。復活した後はどうなるのか。しかしイエスは少しも慌てることもなく、「復活した人たちはめとることも嫁ぐこともない」と言われます。めとり嫁ぐことはこの世の習わしですが、復活した天の国においては、この世の習わしとは全く異なる、と言われるのです。それはこの世の命は天の国での復活の状態を待ち望むものだからです。この世と同じ状態になるのであればそれは意味のないものでしょう。神の国、天の国に復活するとは私たち人間の考えることのできない神秘であり、希望なのです。それだからこそ多くの聖人殉教者はイエスへの信仰に準じて命をささげ、亡くなったのです。



日本二十六聖人殉教の絵

P.S.

来週は小坂正一郎神父様の司祭叙階 60 周年記念、阿部仲麻呂神父様の司祭叙階 25 周年記念のお祝いがあります。多くの方のご参加でお祝いをいたしましょう。

カトリック足立教会

主任司祭 野口重光